

「動機づけ」研究の調査方法とその課題点

—パラダイムの観点から—

秋 山 朝 康

An investigation into issues and problems of motivational study using paradigm framework

Tomoyasu Akiyama

Using 'paradigm' framework established by Guba and Lincoln (2005), this paper discusses issues of research methods used in motivational research in applied linguistics. Much motivational research is involved in statistical analyses into the data drawn from questionnaires (positivist paradigm). However, motivation is such an abstract and multifaceted construct that it is necessary for researchers to have a constructivist or interpretivist paradigm. This paper argues that consideration into the paradigm would provide insightful suggestions for future motivational research.

1. はじめに

この論文を書くきっかけとなったのは筆者の授業に対する考え方が変わったところが大きい。20代や30代の中学・高校教諭だった頃は、「教師の役割は学生に英語を教え込むことである。そのためには、絶対唯一の完璧な教授法を探すことが必要である。」と考えていた。40代になり教師の主な役割は教え込むというよりは、「いかに学生の動機を高めるか」ということであると痛切に感じるようになった。つまり、いかに授業以外

で、学生が自主的に学習に取り組む時間を増やすことが重要であると思うようになったのである。なぜならば授業における学習のみでは学生の能力（英語力）の発達には限界があると感じたからである。私の授業観は教師中心の授業（教え込む）から学習者中心（自主学習を促す）の授業にシフトすることとなった。

上記では教師の役割は学習者の動機を高めることだと述べた。しかしながら、「学習者が動機づけられた」とか「動機が高まった」と判断するにはどのようにすればいいのだろうか。そのような調査研究は未だ開発途上である（上淵，2004）。もし動機が高まったという証拠（データ）を見つめることができれば、教師は指導に有益に活用できるのではないだろうか。

本論文は動機づけの調査方法（リサーチメソッド）に焦点をあてて論じる。近年、動機づけの理論や動機のみカニズムを示すモデル開発が応用言語学や教育心理学では盛んになってきているが、データ収集は多くの場合限定されてい（上淵，2004）、依然として理論やモデルに深さがないように思える。この論文の目的はリサーチパラダイム（研究に関する哲学的観点）を動機研究に応用し動機づけの調査方法を論じ、これからの動機づけ研究方法に示唆を与えることである。

2. パラダイム論と動機研究方法（リサーチメソッド）

このセクションは二つに分かれている。前半は、リサーチにおけるパラダイムについて述べる。後半は応用言語学内での動機研究におけるリサーチメソッドを概観する。

2.1 パラダイム

リサーチに関するパラダイム（paradigm）とは、研究者のものの見方

(真実は実在するか否か) や態度 (主観的vs.客観的) に関しての枠組みといえよう。Lynch (2005) は、次のように述べている :

A paradigm can be thought as a lens through which we view the world. Different lens entails different assumptions about the nature of the world and the ways in which we should attempt to understand it.

(<http://www.iltaonline.com/newsletter/01-2005may/latdialog-lynch.htm>)

上記の引用は、パラダイムを我々が世の中を見るレンズに例えている。世の中とはここでは物事の本質 (事実) を指している。異なるレンズで世の中の本質を見る場合、レンズが違えば本質の前提も違ってくるし、その本質を理解しようとする方法も違ってくる、というのが彼の主張である。Guba (1990 : 17) はパラダイムを ‘a basic set of beliefs that guide action’ と述べている。つまり、研究者が真実をどのように考え、どのように関わり真実を探求していこうか、という枠組みであるといえよう。例えば「教授法」を真実と仮定すると、あるパラダイム感を持つ研究者は全ての学生に対して有効な教授方法は存在すると考えるかもしれない。また、ある研究者は教授法というものは個々の学生に特有なものであって、誰に対しても有効な教授法は存在しないと、考えるかもしれない。この両者の教授法に関する考え方の本質は違っている、つまり、パラダイムが違っているということになる。

上記ではパラダイムとは研究を行う研究者自身が踏まえていく指針の枠組みと考えることができると述べた。データを収集する前に研究者が踏まえて置かなければいけない道筋とも言えよう。Guba (1990) はその枠組みを3つの段階に分けている (表1参照)。

表 1 : リサーチパラダイム

レベル	具体的な質問項目
Ontological level (研究者の真実の見方)	What do we think we can know? What is reality?
Epistemological level (研究者と真実との関係)	What is our relationship to the thing we are trying to know?
Methodological level (研究者データ収集法)	How do we go about our pursuit of knowledge?

第一の段階は ‘Ontological level’ である。これは真実 (reality) とは何か? と考える思考レベルである。Lynch & Hamp-Lyons (1999) は ‘What do we think we can know? What is reality?’ を考えることと定義している。つまり、研究で「何かを知るあるいは何かを発見」するということはどのような事を意味するのか問うことだと意味づけている。実証主義 (Positivism) と構成主義 (Constructivism) を例にとって ‘Ontological level’ を説明すると、前者の研究者は真実はどこかに存在すると考えていて、それを探るのが研究であると考えだろうし、後者の研究者は、真実は探し求める内にあるとする考え方であるといえよう。

第二段階は ‘epistemological’ レベルである。Lynch & Hamp-Lyons (1999) は ‘what is our relationship to the thing we are trying to know?’ と述べている。つまり、研究者と真実の関係はどのような関係であるかの段階である。真実にたいして、研究者はどのように関わるのか? 具体的に述べると、実存主義観を持った研究者と真実の関係は、完全に分離している。どこかに存在している真実に対しては、なるべく研究者は客観的に科学的に接していくであろう。一方、構成主義者は真実はどこかに存在はしない、研究対象から生み出すため、自ら深く関わるだろう。この二つのパラダイムの相違は、真実を探し出すのか産み出すのかであると言っても差し支えないであろう。

第三段階は具体的な研究方法 (データ収集) に関わってくる段階であ

る。Lynch & Hamp-Lyons (1999) はこのレベルに関して次のような問題を掲げている：‘How do we go about our pursuit of knowledge?’ 研究者はどのような方法を用いてデータを収集しどのような分析方法で真実を追い求めるのか。例えば、実存主義のアプローチとしてはすべての変数を排除して、または制御して（準）実験的・量的な（quantitative）手法を用いて真実を追い求めるだろうし、構成主義者のアプローチとしては質的な（qualitative）手法を用いるだろう。応用言語学分野においては、前者の典型的な手法は具体的にはテストやアンケートでのデータ収集方法で高度な統計的分析そのまま、後者は、面接法（インタビュー）、観察法、日記研究による質的な分析方法である（Hatch & Lazaraton, 1991）。ここで注意すべきことは研究を開始する際に、すぐにデータ処理方法 & 分析を決めるのではなく、表 1 にあるように 3 段階を十分考慮すべきであるということである。

もう一つこのパラダイム議論で注意しなければいけないことは、実存主義者は量的な（quantitative）手法を用い、構成主義者は質的な（qualitative）手法を用いるという、二者択一のような単純な事ではないということである。ここはBrown (2005) が主張するように、実存主義から構成主義までの連続性と捉えた方がより現実的であろう。

研究においてパラダイム議論を踏まえることは我々に色々な示唆を与えてくれる。すべての研究者自身がパラダイムを意識しているわけではないのに、その特定の分野（例、第二言語習得研究、言語テスト研究、教育心理学等々）で偏りの傾向がある。例えば、言語テスト分野では実存主義の傾向が強い。つまり、ある分野においてどのパラダイムに基づいて研究がされているかがわかる。逆に言えば、これは、ある分野においてどのようなパラダイムが欠けているか、わかるということである。結論として、パラダイムを吟味すると、どのようなパラダイムを基にし

た研究が十分なされていないかわかり、どのような研究が必要かを示唆してくれる場合がある。以下に述べる、動機の研究でもそのケースに当てはまるのではないかと筆者は考える。

2.2 動機づけ研究方法

動機づけ (motivation) とは教育界にとってキーワードになりつつあることは最近の研究からもよくわかることである(山岡, 2004)。ここでは、まず、動機を簡単に述べ、動機づけ研究に関わる課題を議論する。

動機とはどのようなものであろうか。Dörnyei, & Skehan (2003 : 614) は、大枠として次のように述べている :

In broad terms, motivation is responsible for why people decide to do something, how long they are willing to sustain the activity, and how hard they are going to pursue.

上記でDörnyei & Skehanは動機を3つの段階で捕らえていることがわかる。第一に、なぜ人は何かをすることを決めるのか (the choice of a particular action)、第二に、決めたことをどれくらい維持できるか (the persistence with it)、第三に、どれくらい強くそれを求めていけるのか (the effort expended on it)。動機に関する‘節目’は3段階 (動機の芽生え→動機の維持→動機の強さ) あると考えられる、しかしながら、代表的な動機理論は主に第一段階を焦点に絞られている (参考資料)。つまり、どのようにしたら動機が発生するかの要因に焦点が絞られていて、第二、第三段階にはあまり言及されていない。このことは動機という概念の一部分しかまだ研究が進んでいないということを表している (これは動機という概念の特質を示しているので下記に詳しく述べる)。

次にDörnyei (2001a: 185) は動機という概念の特質を3つ挙げている。

- 1) Motivation is abstract and not directly observable.
- 2) Motivation is a multidimensional construct.
- 3) Motivation is inconstant.

- 1) 動機という構成概念は抽象的で直接観察できるものではないということ指摘している。つまり、動機がどのような構成要素から成り立っているかを定義し、得られたデータから推測しなければいけないということを意味している。これは言語能力、例えば、communicative competenceと同じ抽象的な概念と似ている。
- 2) 動機は多面的な構成概念である。これは、ひとつのデータ収集方法では捉えることは困難であるということを示唆している。つまり、様々な方法でデータを収集することの必要性を意味している。しかしながら、Dörnyei (2001a) も指摘しているように、多くのデータ収集はアンケート調査方法である。
- 3) 動機という概念は静的なものではなく動的（ダイナミック）なものである。前述の、動機は少なくとも3段階に分かれているということからもわかるであろう。また、我々の経験からわかるように、動機づけは周りの環境や状況により時々刻々と変化していることからわかる。

3. 考察（パラダイム論から動機研究への示唆）

このセクションではセクション2で述べたことについて議論する。つまり、動機という構成概念を研究する際に動機という概念をどのように捉えるかという問題（パラダイム）について論じる。

パラダイムは動機研究に様々な示唆を与えてくれる。動機とはそもそも抽象的で多面的でしかもダイナミックな特質を持った非常に研究するうえで捕らえにくい概念である。パラダイムの第一のレベル (Ontological level) からしても、上記で述べた3つの動機の特質に反する。

次のレベルである (Epistemological level) でも研究者は真実 (動機という構成概念) に対して深く関わっていかないと真の姿は見えにくいのではなかろうか。何故ならば、被験者の内面を探る際に、研究者は動機という概念に客観的に向き合うことが難しいからである。

第一・第二のレベルが具現化する第三段階 (データ収集方法: methodological level) では、動機づけの調査はアンケートを使っただけのデータ収集が多い。Dörnyei (2001a: 239) はその理由を次のように述べている:

Because of the strong initial influences of quantitative social psychology on L2 (second language) motivation research, qualitative studies have traditionally not been part of the research repertoire in the field.

社会心理学のデータ収集方法の影響で第二言語における動機研究も量的な研究がなされているということを上記では述べている。代表的な方法はアンケート調査である。その長所は比較的短時間に広範囲に多量に実施できるということである (Brown, 2001)。アンケートは大量のデータを統計的に処理するためにモデル開発には有効であるものの、3つの特質を持つ動機という概念にはなじまないのではなかろうか。解決策としてはDörnyei (2001a & b) が述べているようにもっと質的なデータ収集法 (インタビュー、観察、日記) を採用する必要がある。

上淵 (2004: 185) は心理学分野においても動機研究での問題点を指摘している。

心理学は現在細分化されつつあるが、特に大きく分けると2つの流れが生じつつある。それは一方ではおおざっぱに言って、人文科学的な立場であり、質的研究法方法論として持つ主観性、間主観性、相対主義を重視する立場である。もう一方では神経科学的な研究に代表されるような自然科学的な方法論をとる立場である、客観性、還元主義、実証主義を重視する立場である。

次のセクションでは以上の議論を踏まえてまとめていき、応用言語学における動機研究への提案をしていく。

4. 結論

4.1 まとめ

動機づけは新時代に入ってきており最近様々な研究がなされてきている。しかしながら、その研究の多くは動機づけのモデルの開発や既に発表されたモデルを検証する追研究のものが多い。それはどちらかというところ質的ではなく量的な研究である。また、統計ソフトを利用する研究のための研究のような専門的色彩感が強い。従って専門誌などを読む場合にも相当な専門知識が必要になってくる。現場の教師が読むのには困難なことが多いであろう。従ってどの教師にも現場で実施可能なアクションリサーチを取り入れた動機づけの研究方法が望まれる。

パラダイム理論は動機研究の研究方法に示唆を与えてくれる。動機研究では「構成主義的かつ主観的」なパラダイムをもつ研究が少ない。つまり動機という概念を対象とする場合、従来の方法は十分であるとは決して言えない。アンケート法がよく利用されるが、アンケート調査では学習者の微妙な内面の感情を確実に調査できない可能性がある。パラダイムの3つの段階を踏まえ、動機概念の3つの特質を考えるならばよ

り深く動機という複雑な構成概念を調査できる質的研究が必要になってくる。つまり、動機という概念を被験者の外に存在するとは考えず、被験者の内面に存在し、そこから生まれるというものの見方が有力なのはなかろうか。

4.2 今後の動機づけ研究の展望

言語教育との関係で

動機づけは教育の根幹をなすということについて異論はないだろう。教師が全ての生徒の動機づけに成功すれば教育は成功したものと言えよう。もしその論が妥当であるならば Dörnyei (2001b) はすべての教師には貴重な資料になるであろう。この本では動機づけから始まり、どのように動機を高い状態で維持していくかの方略 (strategies) も記載されている。その方略を教師が自ら実践し検証すれば、動機づけにとって有益な情報を提供していくことができるだろう。そこで考えなければいけないことはパラダイム論である。生徒はある学校のあるクラス中のある教師によって学習している。このことを考えると、主観主義的なパラダイム観から調査する必要があるであろう。このような具体的な調査方法を開発することが求められる。

言語テストとの関係で

言語テスト分野の波及効果 (washback effect) との関係で動機づけの研究は興味深い分野である。波及効果の研究はまだ始まったばかりである (e.g. Cheng, Watanabe & Curtis, 2004)。テストでどのような指導をすれば生徒は動機づけられるのか、また、動機が高い状態で維持できるのかなど、未解決でしかも語学教育にとっては有益な研究課題が山積している。渡部 (2004) はさらに付け加えて、今までの波及効果の研究は「受

験者に影響が高いテスト」(high-stakes test)の状況が多かったが、これからは教室内でのテスト(小テスト・定期考査)の波及効果と動機づけの研究が必要であると述べている。

参考文献

- 秋山朝康 (2005). 「動機づけ」研究に関する問題と課題—アンケート作成とそのデータ分析に焦点を絞って。動機づけを促す評価方法の研究、文教大学・動機づけ研究会。57-64.
- Brown, J.D. (2001). *Using surveys in language programs*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, J.D. (2005). A Second Turn in the Research Paradigm Debate. The LATE dialogues.
<http://www.iltaonline.com/newsletter/01-2005may/latdialog-brown.htm>.
- Dörnyei, Z. (1996). Moving language learning motivation to a language platform for theory and practice. In *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2001a). *Teaching and researching motivation*. Longman. Longman.
- Dörnyei, Z. (2001b). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2005) Psychology Of The Language Learner: Individual Differences. In *Second Language Acquisition (Acquisition Research)*. Lawrence Erlbaum.
- Dörnyei, Z. & Skehan, P. (2003). Individual differences in second language learning. *The handbooks of second language acquisition*. In Doughty, C.

- J. & Long, M.H. (eds). 589-630.
- Csizér, K. & Dörnyei, Z. (2005). The internal structure of language learning motivation and its relationship with language choice and language effort. *The Modern Language Journal*. 5, 19-36.
- Guba, E.G.. (1990). The alternative paradigm dialog. In E. G. Guba(Ed.), *The paradigm dialog*, 17-27. Newbury Park, Calif: Sage.
- Guba, E.G., and Lincoln, Y, S. (2005). Paradigmatic controversies, contradiction, and emerging confluences. In E.G. Guba and Lincoln, Y.S. *The sage handbook of qualitative research*. (3rd edition). 191-216. London: Sage publications.
- Hatch, E & Lazaraton, A. (1991). *The Research manual: Design and statistics for applied linguistics*. MA: Heinle & Heinle.
- 廣森友人 (2005). 外国語学習の動機づけを高める3つの要因：全体的傾向と個人差の観点から。JACET Bulletin 41, 37-50.
- Lightbown, P. M and Spada, N. (2003). How languages are learned. Oxford. Oxford University Press.
- Lynch, B. (1996). Language program evaluation. Cambridge. Cambridge University Press.
- Lynch B.K. (2005). The Paradigm Debate. The LATE dialogues. <http://www.iltaonline.com/newsletter/01-2005may/latdialog-lynch.htm>.
- Lynch, B.K. and Hamp-Lyons (1999). Perspectives on research paradigms and validity: tales from language testing research colloquium. Melbourne papers in Language Testing, 8, 1, 57-93.
- Norris, J & Ortega, L. (2003). Defining and measurement SLA. The handbooks of second language acquisition. In Doughty, C.J. & Long, M.H. (eds). 717-761.

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則（1999）英語教育語辞典。東京。大修館書店。

上淵寿（2004）。「動機づけ研究の最前線」。北大路書房。

山岡俊比古（2004）。「認知からみた言語習得」。「第二言語習得研究の現在」。

小池生夫、寺内正典、木下耕児、成田真澄編集。23-42。大修館。

Watanabe, Y. (2005). Voices in the Field: An Interview with Yoshinori Watanabe. JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter. Vol.9 No.1. Spring 2005 (p.5-7). http://jalt.org/test/wat_new.htm.

参考資料

理論	主な動機要因	簡単な説明	データ収集方法&分析方法
期待-価値理論 (Expectancy-Value model)	ある課題にたいしての成功への期待感(価値観)	ある課題に対しての価値観が高まれば動機が上がる。	パス解析
達成動機理論 (achievement motivation theory)	達成欲求&失敗回避欲求	達成動機=達成の必要性の度合い+成功の可能性+その価値	パス解析
自己効力理論 (self-efficacy theory)	以前の成績 他人からの励まし 代理学習 他人からの反応	強い自己効力を持つとは自信を持って課題に挑み、取り組む。	パス解析
自己決定理論 (Self-determination theory)	内的・外的動機	内的動機(楽しみ・興味)	パス解析